



東洋英和女学院

史料室だより No.105

2025.11.6 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



(撮影：大隅孝之)

★「写真」で人々の生活や感情を社会に伝えた吉田ルイ子

吉田ルイ子は東洋英和女学院高等部を1953（昭和28）年に卒業し、大学卒業後に放送局の仕事を経て、1961年にアメリカの大学に留学しフォト・ジャーナリストの道に進みます。約10年間ニューヨーク・マンハッタン北部のハーレムで暮らし、帰国後に刊行したルポルタージュ『ハーレムの熱い日々』（1972年）が話題となります。今号では、世界各地に赴き、写真による報道という手法で社会を描き出した吉田ルイ子の足跡をたどります。

★ 目 次

特 集	寄り添い内省し発信する—フォト・ジャーナリスト吉田ルイ子—	平体 由美	……	2
〈資料紹介〉	46 戦後80年特集			
	東洋永和女学校「クラス日誌」にみる戦時下の学校生活②			6
〈東洋英和の先生がた〉	14 丹羽 輝子 先生			
	子どもたちと「ともに育つ」保育の実践者			8
〈報告〉	戦後80年によせて 出流山満願寺訪問			10
	出流山満願寺 集団疎開中の家族の手紙	鈴木 陽子	……	11
史料室から、ごさげんよう	吉田ルイ子さんの同級生のご寄稿	内海 宜子	……	14
利用統計／史料室の活動より	(2025年4月～2025年9月)			15



特集 寄り添い内省し発信する

—フォト・ジャーナリスト吉田ルイ子—

平体 由美

書店や図書館で何気なく手に取った本が、記憶の中に留まり続けることがある。日々の生活の中でその本のことをすっかり忘れ去っていても、表紙やタイトルを目にした途端に、その内容はもとより、読んだ当時の自分をとりまく環境や感情が鮮やかに呼び起こされる。

1953年に東洋英和女学院高等部を卒業したフォト・ジャーナリスト吉田ルイ子による『ハーレムの熱い日々』（1972年）は、そのようなパワーを持つ稀有な一冊であろう。その強烈な印象は、日本のアメリカ理解、黒人理解、そして差別や貧困の中にある世界の人々への関心を多角化した。可哀そう、気の毒だ、危険だ、不潔だ、に留まらない複雑な陰影と、人々が抱く確かな希望を、写真とエッセイで表現したのである。



吉田ルイ子（1934—2024）（撮影：上間 晃）

生い立ち

1934年に兵庫県で生まれたルイ子は、生後一年足らずで北海道の吉田夫妻の養女となり、小学校4年生まで室蘭で育った。室蘭は鉄鋼の街、父は日本製鋼所の責任者で、経済的には豊かといってもいい生活だった。しかし、父はルイ子に贅沢を許さず、むしろ質素で自給的生活を背中を示していた。ⁱ

戦中戦後の室蘭は、アイヌとのいびつな共存空間でもあった。ルイ子はアイヌの同級生がさまざまないじめを受け抵抗していたこと、その子と親しく付き合おうと試みたときに大人社会の差別の壁が立ちはだかったことを記している。さらに、戦後に父がC級戦犯として追放され東京の目黒区に転居した吉田家の人々は、身近に韓国家族と付き合うことになる。子供たちの間に、また大人同士の関係の中にさまざまな蔑視が漏れ出る中、ルイ子の母はそれを是とせず、やんわりと、時には敢然と抗議したとルイ子は回想している。人種・民族・貧富で人を区別しない姿勢を、母は示していたといえる。ⁱⁱ

室蘭の環境と父母の信念は、吉田ルイ子の人格形成に大きな影響を及ぼした。小柄で体が弱かった彼

女だが、さまざまな経験や読書体験を通じて、社会的弱者へのまなごしを涵養していく。

東洋英和女学院での日々

「これからは英語を話せるようにならなければ」という母の勧めで、またルイ子自身が幼い頃から室蘭の海の果てに思いを寄せていたこともあり、帰国子女や留学生が多いという東洋英和女学院に進むことになった。1947年のことである。そこでルイ子は、メキシコ、タイ、中国、エジプト、インド、カナダ、ドイツなどさまざまな国に縁を持つ生徒たちと交わることになる。

東洋英和での経験を吉田ルイ子はそれほど語ってはいない。残された数少ない史料や証言からみるに、テニソンの詩やオルコットの小説を英語で読むといった英語教育に対応するのに苦勞したこと、それを乗り越えて中学2年生のときに全国英語弁論大会の学校代表に選ばれ「民主主義社会における女性の役割」と題して発表したことⁱⁱⁱ、彼女を指導した宣教師のレオーナ・ダグラス先生にさまざまな形で励

まされたことは明らかである。「ルイ子のルイは人類のルイ」というダグラス先生の言葉は、迷う吉田を温かく支えるものだった。^{iv}

1950年代の東洋英和は、吉田ルイ子に民主主義や人権、男女同権などのリベラルな価値に目を開かせる場となった。もともと育まれていたぼんやりとした考えに、言葉を与えたともいえる。しかし彼女の学校生活は、表面的にはともかく、個人的には病欠が多かったこともあり、どちらかというと孤高かつ反骨のものだったのかもしれない。その反骨精神ゆえか、フォト・ジャーナリストとして有名になった彼女を母校での講演に招く際、ある教員からは懸念の声もあがったという。とはいえ講演そのものは生徒たちに大きな感銘を与えるものとなった。日かげ織るこの学び舎の壁の中では、さまざまな価値観が交錯していたのである。

大学進学、就職、留学

吉田は東洋英和女学院高等部を卒業後、慶應義塾大学法学部に進学し、一時外交官を志望する。しかし、1950年代の女性大卒者をとりまく状況は厳しく、専門職も公務員も女性への門戸はごく細くしか開かれていなかった。女子大生が増加したにもかかわらず、彼女たちが社会で活躍できていないことを理由に、「女子大生亡国論」が議論された時代である。本来ならば社会の構造を見直すべきところを、難関大学もメディアも女子大生の存在を批判する方向に世論を導いた。そのような中、吉田は大学卒業後の1957年にNHK国際局の嘱託社員を経て大阪朝日放送に職を得た。しかしアナウンサーの仕事以外では、女性ゆえに幼児番組などが多く、彼女の問題意識と合致する番組制作などの役割は与えられなかった。^v

そこで、かねてから外国に行きたいとの希望を持っていた吉田は、フルブライト奨学金を獲得し、1961年にアメリカに留学することとなる。女性に機会を与える奨学金は、当時フルブライトのものに限られていた。ゆえにアメリカと縁がつながったわけで、当初からアメリカを目指したわけではなかった。

吉田は外国人の少ないオハイオ大学で、自ら望んで英語漬けの生活を送ることになった。しかしオハイオで感じたことは、世界第一の国であるにもかかわらず、自分とその周辺という狭い範囲のことしか関心のない学生たちや、在学中に結婚相手を見つけることに奔走する女子学生への失望だった。「そこ

には半年いたんですけど、もういたたまれなくて。都会で育ち、生活していたせいか、いい人たちばかりなんだけど、とてもああいう田舎は…。」^{vi} 室蘭での生活を忘れたかのような発言だが、これは知識として知っていたアメリカとは異質の、多様なアメリカ社会の一端に触れたことの衝撃を表しているのだろう。

その後、ボストン大学夏期セミナーで番組制作を経験し、吉田はニューヨークのコロンビア大学に行きついた。この間、彼女が何を学ぼうとしたのかははっきりしない。ジャーナリズムの世界で活用できる番組制作の技法や、伝えることの基盤にあるべき社会構造と国際関係の基礎知識を積み上げながらも、おそらくは自分の問題意識の整理と表現の方向性について、さまざまな葛藤を繰り返していたことだろう。得意だったはずの英語も、母語でジャーナリズムを学ぶアメリカ人学生には遠く及ばないことを実感させられたのだ。

写真との出会い

コロンビア大学の白人学生と結婚した吉田は、ハーレムのアパートで勉学を続けつつ、英語コンプレックスを解消できずに鬱屈としていた。そのとき、夫に勧められて出かけた写真展「ザ・ファミリー・オブ・マン」の作品のひとつに、吉田は目を吸い寄せられた。助産師の手で取り上げられたばかりの、羊水に濡れて光っている幼子と、窓の外でそれを見守る二人の子どもを写したものである。社会派のフォト・ジャーナリストであるユージン・スミスの作品だった。

ユージン・スミスは、『ライフ』誌の従軍記者として太平洋戦線に同行し、沖縄戦の取材中に重傷を負った人物である。帰国後、療養を経て、彼は写真家として再出発した。トラブルで『ライフ』誌との契約を破棄した後、1957年にニューヨークのミッドタウンに居を構え、ジャズミュージシャンをはじめとする新進芸術家に肉薄する写真や、ベトナム反戦運動に参加する人々など、社会の不条理と希望を撮り続けた。ちなみにスミスは1970年代に、水俣病患者の写真によって日本でも広く知られるようになる。

スミスに触発された吉田は、ハーレムの隣人たちの表情を撮り始めた。コロンビア大学大学院もジャーナリズム科からフォト・ジャーナリズム科へ

と転科した。写真でその背景や未来の物語も伝えるような一瞬を表現すること。それは吉田が獲得した「言葉」、すなわち、人々の生活や感情を社会に伝え続ける方法だった。「私は心の中にいろいろな思いをため込んでいて、自分を表現するものをいつも求めていた。そこで写真に出合った。その場所がたまたまアメリカだった。」^{vii}

ハーレムから日本へ、そして世界へ

吉田が過ごした1960年代のアメリカは、黒人の権利獲得を目指す公民権運動、フェミニズム運動、学生運動、ベトナム反戦運動が繰り広げられる「権利革命の時代」であった。これら広く報道された社会運動の水面下では、先住民の権利や、ものを言わない「モデル・マイノリティ」と言われた日系人による第二次世界大戦中の強制収容に対する謝罪要求への動き、ゲイやレズビアンへの権利についての議論も芽生えはじめていた。

吉田はこれらの運動に写真家として寄り添ったものの、自覚的に参加はしなかったようだ。しかし、ハーレムを取り巻く状況の変化、次第に過激化する運動に夫が漏らした蔑視的発言への違和感、離婚と一人暮らしによる経済的格闘の中で、自らの立ち位

置を何度となく確認し続けた。その過程で、差し出された貧しい黒人男性の手を握り返せなかった自らの差別性にも気づいていく。アメリカ社会における人種秩序の根深さ、「ブラック・イズ・ビューティフル」の標語がハーレムの人々に与えた影響、自分がアジア系であることの痛みなどを受け止め、その根幹にあるものを熟考するとともに、運動の中に埋もれていきがちな「個人」の写真を撮り続けた。^{viii}

1971年、吉田は「嫌いでも好き」なアメリカから、トランク二つ分の写真を携えて日本へと帰国した。1972年にはハーレムの写真展「ブラック・イズ・ビューティフル」で評判となり、同年『ハーレムの熱い日々』を出版して全国に大きな衝撃を与えた。危険、ドラッグ、貧困といった日本社会における黒人のイメージを、再考させるきっかけを作ったのである。

その後、吉田はフォト・ジャーナリストとしてベトナムや韓国、インド、エジプトなど、世界を飛び回ることになる。戒厳令下の韓国で自宅軟禁中の金大中にインタビューし、ニカラグアのオルテガ大統領に会い、キューバのカストロ議長を取材した。危険や尾行、行動制限も数多く経験した。映画スターでベトナム反戦運動や反原発運動などに関わった



ディーブサウスの子供たち（撮影：吉田ルイ子）

ジェーン・フォンダ、60年代のラディカルを代表するトム・ヘイドンなど、有名人への取材も多い。

一方で、彼女のレンズは普通の人々をとらえることも忘れない。綿花畑をバックに笑う黒人の子供たち。夏の夕暮れ時に消火水栓を開放して遊ぶ子供たち。失業率40%を超える中、履歴書を持って職探しをするハーレム出身の若者たち。アパートヘイト下の南アフリカの黒人居住区で乳児を抱く少女。ベトナムの孤児院における戦争孤児たち。

「何を撮るか、何を撮らないか。そこに撮影者のすべてが露呈しますよ。写真を撮ることは、裸になることに等しい。」^{ix}

受け継ぐバトン

吉田ルイ子が直面した、「女性」フォト・ジャーナリストへの好奇の視線や、女性が大物政治家などに単独インタビューすることへの揶揄は、現在ではかなり軽減された。しかし、昨今のテレビ局において「女子アナ」が期待されている位置取りなど、女性の働き方には未ださまざまな性別役割期待がついてまわる。

同様に、吉田が見たアメリカの人種秩序は、形を変えながらも現在に続いている。日本においても、吉田が活躍した時代にはおそらく想定されていなかった「移民社会」が展開し、対岸の火事的に眺めていた人種間・民族間の緊張にどう対処していくかが問われている。もちろん、アイヌなど先住民との共存や、戦後から今に続くミックスト・レイスの人々の排除と包摂の問題を、都合よく無視してはならない。吉田が批判した「リベラル白人の始末の悪さ」すなわち、主流派がマイノリティに寄り添うかに見せながらその根底に蔑視がある事実は、いまの日本でも問われることである。

そして何より、スマートフォンで誰でも気軽に画



ディープサウスの子供たち（撮影：吉田ルイ子）

像や動画を撮影し、社会に発信することができる現在、吉田が突きつけた問いはより一層重要なものとなる。何を撮るか。何を撮らないか。そこにコミュニケーションと愛はあるのか。

吉田ルイ子は2024年5月31日、89歳でこの世を去った。幼い頃から身体が弱く、高校も長く欠席した吉田は、フォト・ジャーナリストとして世界を回る体力と気力を持ち続け、そして我々に重いバトンを残していった。

（国際社会学部教授〈アメリカ史〉・史料室委員）

※吉田ルイ子氏の関連記事は、本号14頁に掲載

【注】

- ⁱ 「おやじの背中」『朝日新聞』1995年1月23日。
- ⁱⁱ 吉田ルイ子「この子を信じていますから」、石坂啓編著『母を語る』倫書房、1998年。
- ⁱⁱⁱ 「伝統ある英和の国際教育」『東洋英和女学院東光会会報』1990年7月。
- ^{iv} 「私と先生」『朝日新聞』1990年2月10日。
- ^v 小河修子『フォトジャーナリスト吉田ルイ子』理論社、1998年。
- ^{vi} 「アメリカ I hate but I love——筑紫哲也と語

る」、吉田ルイ子『吉田ルイ子のアメリカ』サイマル出版会、1980年。

^{vii} 「[ひとり語り] 吉田ルイ子さん 広いつながら求めて いつまでもハングリー」『読売新聞』1998年10月27日。

^{viii} 「根深い黒人差別 自身の中にも」『朝日新聞』2020年9月30日。

^{ix} 「苦しい状況下であっても希望を持つ、それも人間の真実。その光をとらえたいと思う」『朝日新聞』1996年8月5日。

〈資料紹介〉46 戦後80年特集 東洋永和女学校「クラス日誌」にみる戦時下の学校生活 ②

勤労働員の通年化 学年で大きく異なる学校生活

前号に引き続きクラス日誌を紹介する。

1942（昭和17）年のミッドウェー海戦敗北後、厳しい戦況の中で、1943年6月には「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定し、本土防衛のため軍事訓練と勤労働員が推進されていく。1944年3月には学徒勤労働員の通年化が閣議決定、4月には女子学校の軍需工場化が文部省から指示される。

それを受けて、東洋永和女学校の在校生たちも、1944年7月1日には高等女学科3・5年生が学校内に開設された沖電気の東洋永和作業所にて、4年生が安藤電気蒲田工場にて通年で勤労働員されていく（※勤労働員については「史料室だより」No.75、No.76で特集。「史料室だより」は全号、東洋英和女学院のホームページで閲覧可能）。

そのため1944年以降のクラス日誌は、上級生は労働の合間の時間によりやく授業を受ける有様になり、4年生は学外の工場に出勤するなど、同じ学校の生徒でありながら学年によって見えてくる風景が大きく違うことに特徴が出てくる。

1年生 毎朝礼拝があったことを知らない生徒たち

前号で述べたように、東洋永和女学校は1944年3月に国が定めるところの高等女学校となったため、学内での宗教教育・儀式が行えなくなり、毎朝の礼拝が無くなる。この年の1年生は元からの礼拝習慣を知らず、日誌には聖書や礼拝についての記載がほとんどない。しかし、学内での礼拝のかわりに6月5日から始まった麻布教会での礼拝については「今日始〔ママ〕めて礼拝が御座いました」と記録している。この学年が毎朝の礼拝を体験するのは、終戦後の1945年11月1日であり、「今日から朝礼の時に礼拝を致します。今朝初めての礼拝でしたが、本当に一日気持ちよく勉強出来ました」と記している。

一方、ほかの学年は毎朝の礼拝が無くなった寂しさを語り、1944年4月26日の4年生の日誌には長野彌先生が久しぶりで聖句を読み、「ついこの間迄

の礼拝を思ひ出して大そうなつかしうございました」とあり、同日の5年生の日誌にも「…朝礼は講堂で致しました。その後長野先生から礼拝が全々〔ママ〕なくなってしまうのではないこと〔中略〕、重大な時局にあつて益々キリスト教の意義も重大であること等のお話がありました」と記録されている。苦渋の決断により表向きはキリスト教教育を封じた長野先生の真意を、生徒たちは見逃していない。

2年生 12月からの動員と讃美歌

4月に「つい此の間、入学したばかりだと思つてゐたのに」「下級生も出来てしまった」と語る2年生も時局柄「のんきに勉強をして居られなくなり、増産にはげまなければならなくなった」と記し、この年の12月16日には動員対象となってしまう。

動員後の日誌では、昼に聖歌隊活動をしていることも散見され、翌1945年3月23日には作業所で仕事がなかったので「朝からお昼まで小林〔悦子〕先生と比屋根〔さかえ〕先生と御一緒に讃美歌を歌つた」と書かれている。音楽教師の小林先生は安藤電気蒲田工場でも生徒たちにたびたび讃美歌を歌わせている。先生は勤労働員中も軍の許しを得て休み時間は讃美歌を歌っていたのだという。尋常ならざる学生時代を過ごす生徒たちを、讃美歌を歌うことで励まそうとした小林先生の奔走ぶりが目に浮かぶ。

3・5年生 クラス日誌と作業所日誌の交錯

1944年7月1日に3・5年生は学校内の沖電気東洋永和作業所に入所する。残念ながら3年生の日誌は19・20年度ともに所蔵がなく、5年生の日誌は1組も2組も4月5日～7月15日の記載で終わっている。おそらくそれ以降の日誌は「昭和十九年七月一日以降 沖電気株式会社東洋永和作業所日誌」（勤労働員関連の資料については「史料室だより」No.75、No.76〈資料紹介〉18、19を参照）に引き継がれていくが、日誌の書き手は生徒から教員に代わる。

3か月間のみ5年生の日誌には、武道の授業が

始まり長刀を訓練したことや、男性教員の召集などが書かれ、6月21日には光明照子先生から勤労働員がいよいよ始まる説明を受ける。作業が始まった7月6日には「電波兵器が国家の勝負をきめるとおっしゃいましたので私たちは尚一層自重して生産増強に努めやうと思ひました」と記録されている。そして7月7日には「作業場にて御指導のもとに愈々念願の兵器製作にとりかかりました。詳しい内容は家に帰っても絶対にもらさぬやうにとの事でございます。」と厳命される。生徒による記録が7月15日で終わるのは、情報漏洩防止のためだろうか。

4年生 学外での勤労働員の様相

ある種の緊張が漂うのは4年生の日誌である。世間知らずの生徒たちを学外の工場へ、他人の中に送り出す教員たちの苦勞がしのばれる。4年1組は、従業員への朝の挨拶の態度に始まり、不平を漏らしたり、ふざけてしまいがちなのを懸命に鶴沼幸先生や水木百代先生が指導している。生徒たちを守るためであろう。対して2組は整然とした記載が多い。勤務開始の前日6月30日の壮行会のあと「最後に懐しい思出〔ママ〕の深いお教室の御掃除を丁寧に綺麗に致しました」とある。7月1日には出勤が始まるが、4年生の日誌で特徴的なのは、工場での報告を通じてサイパン島陥落など戦局がよくわかることである。さらには当時報道規制が敷かれていたとされる12月7日に発生した昭和東南海地震について、12月10日に「会社の鷺津工場では昨日の地震で相当の被害をかうむり、死傷者を十名近くも出した様でございます」と記録され、生徒がお見舞い金を送っている。

また、10月6日には根立増子さん、10月10日には水野良子さん、11月28日には小川小枝子さんが亡くなった記録が残る。一緒に働いていた友への哀悼の言葉が記され、葬儀に赴きお焼香をあげ、讃美歌を歌う少女たちの心には「死」の影がよぎる。

学校から離れて働く生徒のもとに教員も駆けつける。11月6日、午前中は警戒警報発令のため学校で行えなかった創立60周年記念式であるが、長野先生が蒲田工場に出向き、警報解除後の3時の休憩後、工場の食堂で記念式が行われる。「私共はそろっ

て懐かしい校歌を歌ひ、後、長野先生より永和女学校創立当時の事等種々伺ひました」とある。11月20日には動員されている生徒のために「慰安の意味で音楽会を学校でして下さるさうでございます」との記載もある。せめてもの学校行事の開催である。

そして、この学年の生徒は翌1945年3月に4年生で繰り上げ卒業となる。3月5日には「小林先生がおいで下さり、午後から卒業式の御歌を練習致しその後で讃美歌を歌ひました」とあるが、3月10日に東京大空襲となり、電車の不通、出勤者は極く少数、家が焼けてしまった友人もいる…という惨状を経て、3月27日に卒業式を迎える。級長だった赤堀擴子さんの3月22日の記述で4年2組の日誌は終了している。そこには「朝礼の後、最後迄日本刀を手に戦った硫黄島勇士の御冥福を御祈り致しました」と記されている。史料室には赤堀さんの卒業時の資料が寄贈されている。印刷工場が燃えてしまったためわら半紙に刷られた卒業証書をはじめ、友人たちにメッセージをもらった「Birthday Book」、そして工場の司令官たちにも寄せ書きしてもらった帳面（表紙は中原淳一画）には、赤堀さんのトレードマークだった「おさげ髪」のイラストが描かれている。非人間的な状況下でも、讃美歌を歌い、何かしら少女らしい美しいものを求め、人と人との交流を忘れなかった「永和生」たちのことを、現在の私たちも心に留めておきたい。

松本 郁子(史料室・史料室委員)



赤堀擴子さんによるクラス日誌(右)、友人と交わした「Birthday Book」に描かれたカラフルなイラスト(左上)、卒業時などに友人も含め、工場の軍人達にも寄せ書きを書いてもらった和綴じ本(左下)

〈東洋英和の先生がた〉14 丹羽 輝子 先生

子どもたちと「ともに育つ」

保育の実践者



東洋英和幼稚園に宿る丹羽先生の“魂”

今年2025年7月に東洋英和幼稚園で行われたホームカミングで、ある卒園生は「幼稚園にやって来て、丹羽輝子先生の“魂が残っている”と感じる」と語ったという。約30年にわたり幼稚園で奉職された丹羽先生は、お名前（輝子）のごとく、ひまわりのような笑顔をたたえ、ユーモアにあふれ、楽しいことが大好きであり、その中に芯の強さも持ち備えていた方だったという。

生い立ち 保育者の道へ

1932年にシンガポールで生まれ育った丹羽先生（旧姓：大久保）は、1939年に日本に帰国し、1944年に東洋永和高等女学校に入学、戦後に東洋英和女学院短期大学保育科に進学し、宣教師のミス・ハミルトンやミス・スクルトンたちから保育とともに礼儀作法、生活態度におよぶまで厳しく指導された。卒業後、本郷中央会堂幼稚園勤務などを経て、夫君の丹羽芳雄氏の留学に伴いミシガン州立大学大学院幼児教育コースを聴講する機会を得て、1970年に東洋英和幼稚園に着任し、短期大学保育科の非常勤講師も兼任、1990年から1997年まで東洋英和幼稚園長を務めた。

お得意だった運動、料理、手芸、音楽

今回、多くの方々から丹羽先生のエピソードを寄せてくださった。中高部時代にバスケットボール部で活躍した先生はスポーツが得意。そして、園庭で収穫した果物のジャム作りに始まり、料理もお上手だった。保育者向けの無人島体験プログラムの講習会では、一斗缶と与えられた材料で班ごとに火おこしをし食事を作るという課題があり、先生は野尻湖での豊富なキャンプ経験と料理の腕を活かし、カボチャケーキのデザートまで作り、その行動力と柔軟な発想力、料理の腕前に皆が驚き、同じ班の保育者たちは大喜びしたそうである。

さらに先生は刺繍や編み物も大好きで、お手製で

編み込みのお気に入りのセーターをよく着用していた。またスウェーデン織物に興味を持たれ、小さな織機を購入されたほどだった。

音楽の才能は殊に優れていた。先生のピアノの音色で、子どもたちの心と身体は、自然に解放され、気持ちよさそうにのびのびと表現を行った。また、保育者にはホールでの基本リズムや踊り、自由表現、劇遊び、楽器や音作りの活動にあたり、環境設定に加え、「子どもの足の動きをよく見てピアノが合わせること」「子どもの感性を大切にすること」「保育者も良い音楽に触れること」などを教えた。

先生の音楽への取り組みは「Music Making—創造活動の一環として—」と題した研究（藤井清子教諭、赤羽まり教諭と共同発表）に結集し、1974年には日本保育学会において倉橋賞を受賞している。

また、1991年出版の『幼児さんびかⅡ』についても、丹羽先生はキリスト教保育連盟の幼児さんびか委員長を担った。子どもの遊びや生活が目に見えかぶような先生作詞の「さようなら」「まもり」「みみをすまして」「ほんとにだれが」が掲載された。いずれの曲も園児の大好きな讃美歌である。

「感性」を重視した保育

丹羽先生は、見る、触れる、嗅ぐ、味わう、聴くといった五感を働かせる経験を重んじた。保育者にも展覧会や舞台、音楽会、ウィンドーショッピングなどで本物を見たり、自然の中での体験を通して、「感性」を養うことを勧めた。子ども達にも、例えば、お店ごっこにとどまらず、実際にパン屋さんを見学してからパン作りをするなど、パンの香りにはじまり、自分たちの手でパンをこね、味わう「感性」を駆使し、子ども達自らの心が動く体験に園児達を導いた。

使命感を持って幼稚園創立80周年を主導

東洋英和幼稚園は1994年に80周年を迎え、そこでも丹羽園長の力が発揮された。園児・保護者・教職員・卒業生と共に「英和音頭」を創出するなど、

先生発想のユニークな周年事業が実現された。

なかでも『東洋英和幼稚園80年の歩み』は、それまでに幼稚園の保育の歴史をまとめたものがなかったため、生きた保育のありのままを記録し、保育の原点を探り、考え、これからの保育に役立てたいという思いから、使命感をもって刊行された。

年史の編集作業に協力した露木公博氏によると、丹羽先生は日常業務に加え、参考資料等が全くない状態からの資料収集や従前の園長先生たちとの連絡など激務を極めたが「私がいる間に80年の歴史を形にしないと後世の方が困る」という強い思いをもって年史編集に奔走された。

多くの保護者の協力を得、丹羽先生を中心に、「東洋英和幼稚園創立80周年記念 感謝の集い」も東京プリンスホテルで行われた。

丹羽先生が残した業績の数々

バングラデシュで、子どもたちに寺子屋（小学校）を贈ることを目的として設立されたアジアキリスト教教育基金（ACEF）と幼稚園とのつながりは、丹羽園長が推奨した1992年のセミナー、夏のスタディーツアーへの参加に始まる。その後も支援活動は続き、2019年8月には教師養成のための「丹羽メモリアル研修センター」が現地に建設された。

1997年3月の定年退職後は、那須塩原に住まいを移されたが、東洋英和幼稚園で開かれる「虹の会」（聖書講読会）のお世話役を担い、東洋英和との歴史も深い社会福祉施設である興望館では2006年に興望館保育園幼児部スーパーバイザーに就任し、子どもたちと関わり続けた。2014年の東洋英和幼稚園100周年には「100周年のうた」作詞のため、幼稚園の先生たちと一緒に東洋英和幼稚園のイメージを重ね合い作詞を仕上げ、100周年を見守った。

丹羽先生の教育信条

幼稚園の毎月の便り「かえで」の巻頭言で丹羽先生は「東洋英和での出会いの中心、それはキリスト教の神様との出会いでしょう。この、人の生き方の根源にかかわる出会いを大切にしたいと思います。神様の愛にふれて、わたしたちも自分のことばかりでなくいつも周囲に目を配る事を忘れずに少しでも生かされている自分を、感謝しながら又それを生かして神と人に喜ばれる様に、みんなで心を寄せ合って、一日一日を大切にしながら成長していきたいと願っています」と記している。



ごっこ遊びからパンづくりへ。パン屋さんを見学する丹羽輝子先生と園児たち（1992年）

丹羽先生は「ともに育つ」ことを大事にした。先生の生涯は、いつも子どもたちと共にあり、喜びを分かち合い、愛をもって「共に生きる」ことの証しそのものであったという。

丹羽先生は宣教師から保育を学び、母教会を同じくする学院に献身的な働きをされた長野彌先生を尊敬していた。幼稚園80周年には感謝の献金をカナダのセンテナリー教会とカナダ合同教会に自ら訪問しささげた。常に東洋英和の原点を見据え、その継承者としての自分の使命を誠実に生きられた。

丹羽先生は、2018年1月17日に85歳の生涯を終えられた。多くの教え子や同僚の先生たち、関わった方々の先生への思いは西那須野教会婦人会『丹羽輝子姉 追悼集』（2018年）にまとめられている。

2018年10月には「丹羽輝子先生感謝の会」が東洋英和幼稚園と、先生が受洗した鳥居坂教会で開かれ、那須塩原から夫君の丹羽芳雄氏も出席され、多くの関係者が参加し、丹羽先生を偲んだ。

松本 郁子（史料室・史料室委員）

丹羽 輝子（にわ・てるこ）先生 （旧姓 大久保） —略 歴—

1932年1月21日	シンガポールで誕生
1951年3月	東洋英和女学院高等部卒業
1954年3月	東洋英和女学院短期大学保育科卒業
1970年9月～	東洋英和幼稚園教諭
(1986年4月～1988年9月)	東洋英和女学院短期大学非常勤講師)
(1990年4月～1997年3月)	東洋英和幼稚園園長)
1997年3月	同 退職
2018年1月17日	召天（85歳）

東洋永和女学校附属初等学校（現 東洋英和女学院小学部）の集団疎開は1944年8月に始まり1945年10月に終了した。本年2025年が戦後80年にあたることになみ、疎開先であった出流山満願寺（栃木県栃木市出流町）を8月29日に高橋貞二郎院長と小学部教員、学院教職員の計7名で訪問した。

JR両毛線・東武日光線栃木駅から車で約40分、市街地を抜け、切り立つ石灰石の鉾山と石灰工場を両脇に眺めつつ山道を進み、蕎麦屋が点在する門前道をさらにのぼり続けると、仁王尊像の立つ山門が現れる。出流山満願寺の入口である。ご山主（住職）のご親族で東洋英和の卒業生である稲野厚子氏・祥子氏母娘と、厚子氏の孫で在校生である稲野絢子さんからあたたかい出迎えを受け、まずは境内を案内していただいた。



足利時代の仁王尊像が立つ山門。向かって右、今は木々が生い茂る斜面の中腹に児童たちの寝泊まりする寮があった。

境内を流れる川を渡る橋から続く階段は疎開児童たちが記念撮影をした場所だ。食堂でもあり学びの場でもあった広間のあった建物は建て替わっているが、見事な龍の彫刻が施された本堂は当時のままである。その先には奥之院が続いており、山内は広大である。満願寺は山の中にあり上空から位置が特定できないため空襲を逃れたというお話に深く頷くのであった。



疎開当時



現在



戦後の夏期学校（1951年）



今も同じ場所にあるお堂

でも満願寺を訪問

広い境内を拝見したのちご自宅へ伺い、疎開当時「御前様」と慕われたご山主竹村教智氏のご息女竹村レイ子氏（戦後に東洋英和女学院中学部入学）、孫で現ご山主の竹村教誠氏も共に歓談の時間を持つことができました。まずは学院を代表して高橋貞二郎院長から感謝の言葉を述べ、感謝状を贈呈した。ご山主からは、当時の児童の心細さや冬の厳しい寒さを慮るお言葉をいただいた。その後、満願寺に伝わる写真を拝見し、学院からは疎開児童と家族の往復書簡（本号11～13頁参照）、疎開絵日記の写し、当時の写真などをお見せした。満願寺の方がたには初めて見ていただく史料である。

今回お迎えくださった方の中で、唯一戦争時を体験しておられる竹村レイ子氏は、讃美歌を歌うのが聞こえてきたこと、寺の講堂にオルガンもあったこと、児童とも交流があったことなどを語ってくださいました。空襲警報は一度だけ経験があり、真っ赤に空が染まって群馬県太田の飛行機工場が爆撃されたと聞いたそう。「父は常々、このような山奥で不便な環境ではあったが、一人も栄養失調で亡くなることはなく安堵したと申しておりました」とのお言葉に「御前様」のご苦勞が偲ばれる。当時の主事（現在の小学部長）外崎長三郎先生をはじめとした教員の尽力や、地元の方がたのご協力と合わせて学院内で語り継がれていくべきであろう。

今回現地を訪れることで、児童たちが過ごした空間を体感し、宗教の違いを超えて児童たちが守られてきたことに改めて感謝するとともに、未来に向け平和の尊さを繋いでいくために教育の場で歴史を語り伝えることの大切さを再認識するのであった。

三笠 知世（史料室・史料室委員）



高橋貞二郎院長から竹村教誠山主へ感謝状の贈呈（左）竹村家、稲野家の皆様と（右）

出流山満願寺 集団疎開中の家族の手紙

鈴木 陽子

同窓生の方より、東洋永和女学校附属初等学校による集団疎開の際に、ご家族で交わされた貴重な書簡資料をお貸し出しいただきました。当時の疎開生活やご家族の思いをたどります。



手紙を書いた少女（以下T子）は、東洋永和（当時の表記）附属初等学校二年生になった昭和20年4月、栃木県出流山満願寺へ集団疎開しました。T子さんの姉は前年の8月から先に疎開しており、別の学校に通っていた兄もすでに川治へ疎開していました。三人の子どもたちは東京に残る家族（両親と就学前の弟Yちゃん）と離れて暮らすようになり、手紙のやり取りで連絡を取り合っていました。T子さんと母親の間に交わされた手紙は24通。他の家族とのやり取りも含め、これらの貴重な資料を拝見させていただく機会に恵まれ、そこに綴られていた内容や感じたことなどを以下に記していきます。

*太文字は実際に手紙に書かれた文面です。旧仮名遣いは現代のものに変えて表記し、必要に応じて、句点や読点も追記させていただきました。また、手紙を含め、以下の文章に記された名前は全てアルファベット表記に変更しています。

まず初めに目にした母からの封筒は、使用済みのものを半分の大きさに切って再利用しており、物資が不足している戦時下において手紙を送るための工夫や努力が、ひしひしと伝わってきました。そして、封筒の中の手紙は、幼いT子さんが読みやすいようにとても丁寧な文字で書かれています。平仮名を多く使い、漢字にはふりがなをつけるなどの配慮に、母親の深い愛情を感じました。我が子と離れて暮らす

不安や寂しさは、どれほどのものだったのでしょうか。

けいぼうがでるたびにおにいちゃまとおねえちゃまとT子ちゃんが安全な所へいっていると思ってほっとします。お母さまはお兄さまやおねえちゃまとT子ちゃんの事をいつもいつも神様にお祈りしています。

5月、疎開に送り出して間もない頃の手紙にはまだ、今までの日常と変わらないような穏やかな光景が綴られていました。

出流はさくらの花がきれいだそうですね。おうちのつつじもぼつぼつ花がさきそうです。ジャガイモのめもでてきました。おねぎも小さいほそいめが一ぱいで、とてもきれいです。五月五日はYちゃんのおせつでした。こいのぼりやかぶとをかざりました。Yちゃんは大よろこびでカタナをふりまわして「ぼくたいしょうよ」なんてむねをはって歩きました。

ところが、5月10日にT子さんへ送った手紙を最後に、7月まで母からの手紙はしばらく途絶えます。5月24日、25日の山の手空襲で自宅は大きな被害を受けたことが、6月に届いた兄からの葉書に書かれていました。

Tちゃんお手紙ありがとう。Y子ちゃん（*注釈姉のこと）も元気ですか。家がやけても元気でがん

ばりましょう。

これまでにT子さんが自宅へ送った両親への手紙は、残念ながら全て燃えてしまったのでしょうか、一通も残されていません。T子さんはその後、母と弟が身を寄せた宇都宮の親族の家に手紙を送りました。けれどもこの宇都宮も7月12日には空襲があり、とても安全なところではなかったようです。母からの手紙には、警報が鳴る恐ろしさや、必要な物が手に入らずに困っている様子の記述が徐々に増えていきます。

8月1日

うつのみやも小型機がたびたびやってきます。敵は大きいうつのみやのそばのひこうじょうをばくげきしますが、あたまの上をとんで行くときはとてもこわくて防空壕の中でYちゃんと二人で小さくなってフトンをかぶっています。うつのみやもおうちからちょっとでると、みわたすかぎり焼け野原です。でもみんなやけのこったトタンでお家をつくってすんでいます。T子ちゃんなど敵のばくげきも知らないでほんとうにありがたいことですね。神様にいつもいつもお礼をわすれないで下さい。(中略)

ふで入れがこわれたそうですが、うつのみやにもかうお店がありません。でもまたそのうちに東京でお父さまにさがしていただきましょう。なんでもなくってほんとうにこまります。Yちゃんはクレヨンがないのでぬりえができません。ほうぼうさがしましたが、ありません。T子ちゃんもイロエンピツもクレヨンも大切にしてくださいね。

そして、いよいよ8月15日に終戦となりますが、T子さんの疎開生活は続きます。

おひるごはんは、Yちゃんと二人でだいようしょくのおだんごをいただきました。そのおだんごは、とうもろこしのこなやさつまいものくきのこなやぬかがまざっていて、ちっともおいしくないのです。お母さまはまずそうにたべていました。Yちゃんはそれを見て「お母さん、せんそうにかつたらば、おいしいごはんたくさんたべさせてあげるよ。」と申しました。お母さまはなみだがでました。なにもわからないYちゃん、日本がまけたといってもわかりません。きつとかつとおもって、がまんしてまうだいようしょくのおだんごもたべているのでしょうか。大きくなってまけたことがよくわかったら、きつとぞんねんにおもうでしようね。よいおねえさまになって、Yちゃんにいろいろおしえてあげて下さいね。

一方、出流山での疎開生活はどのようなものであったのか、T子さんの手紙から振り返ってみたいと思います。

〈疎開先の日々の生活〉

朝は体操から始まり、散歩や乾布摩擦もしていたようです。交代で食事当番もしました。学習内容は、お花を摘んできて写生や観察、そのほかに書き取り、絵日記、音楽やお裁縫(三年生以上)などの記述が残されています。工作で筆立てやかばんを作ることもあったようです。「うらしまのかみしばいを作りました」これは、団樂会(催しものをして皆で楽しむ会)で披露されたのかもかもしれません。

先生の見守りのもとみんなでお風呂に入り、夜は先生と一緒に布団を敷いて寝ます。時には床屋さんが来て髪の毛を切ってもらったこともあったようです。

そして、このような共同生活をする上で欠かせないのが、じゃがいも運び、薪運び、草むしりなどの労働です。特に薪運びは幼い子どもたちにとってかなりの重労働だったようです。「ふどう橋までまきをはこびました。私は二十四本はこびました。」と、T子さんの頑張りが目に浮かびます。

〈食事〉

食事内容は、「今おやつをいただきました。まあるいばんでした。」「じゃがいものとてもあまいのでした」「おさんじはじゃがいもがおさらにいっぱいでした」「きなこが上にかかっている、おみそにだいのいったのがはいっている」「じゃがいものふかしたのに、ごはんにおまめ、だいこんのはっぱでした。」「おむぎのごはんにおじゃがのにたのに、きゅうりをいただきました。」と、少しでも子どもたちが満足できるように、限られた食材に味付けなどで工夫を加えて、食事を準備していたことがわかります。T子さんの手紙は、食事の最後に必ず「おいしかったのよ。」という言葉で締めくくられており、T子さんの純粋さやいじらしさを感じずにはいられません。また、面会に来た家族が届けてくれたさつまいもやドーナツなどを、みんなで分けることもあったようです。

出流山でも食料事情がさらに厳しくなっていく終戦の頃は、「このあいだは村のふじんかいのかたがきて、おさつを持ってきてくれました。」と、村の方々に大変お世話になったようです。特に、10月になり疎開を終えて東京へ帰ることが決まると、子どもたちを村の家庭へ招待していただき、お腹いっぱいになるまでご馳走して下さったそうです。



母と暮らす弟を描いた手紙

〈休養日〉

休養日には、先生方が交代で日曜学校のようなものをしてくださいました。そこでカードをいただくことが、とてもうれしかったようです。9月に父に送った手紙の中に、詩編23：4の聖句が書かれていました。

そしてカードをいただきました。せいしょにでていたことばをならいました。

タトヒ ワレ シノカゲノタニヲ アユムトモ
ワザワイヲオソレジ ナンジ ワレト

トモニイマセバナリ（中略）カミハソノ ウミタ
マエル ヒトリゴヲタマウホドニ ヒトヲアイシタ
マウ ということばをならいました。

日曜学校の後は、身の回りの整理をしたり、本を読んだり、手紙を書いたりするなど、思い思いに過ごしていたようです。

〈戦争の影〉

山奥にあり安全な場所と思われる出流山でも、警戒警報が鳴ることがありました。

7月10日

今はくうしゅうだけど、こっちのほうはだいじょうぶですから、ごあんしんください。うつのみやへだいぶいったそうですね。おひるごろ、とちぎもてつきが見えました。でもあんしんして、ズボンもはかないで遊んでいます。

〈楽しいひととき〉

不自由な生活の中でも、楽しいことがたくさんありました。

「きのうは七月五日のおぼんで、よるねるときにわっしょいわっしょいときこえるのでねまきでとびだして、おげんかんのところへいってみたら、いな

かのこどもたちがおみこしをかついでいました。そしてさかさまになったりしていました。とてもおもしろかったのよ。Yちゃんにみせたらどんなによろこぶかと思いました。」

時折開かれる団樂会は、学年毎に催しものを披露することもあり、子どもたちにとって特に楽しい時間だったようです。

「九月二十三日はだんらんかいです。私はようちえんでならったさくらんぼのおゆうぎをします。」

「きのうはだんらんかいをしました。五年生のおじぞうさまのげきがとてもおもしろかったのよ。二年生のシンデレラのげきもおもしろかったのよ。」

T子さんの手紙にはいつも「Yちゃんは元気で遊んでいますか」「このおりがみをおくりますから、Yちゃんがなんかつくっておくってください。」と弟を思う気持ちで溢れていました。「お花 Yちゃんへあげてください」と書かれた包み紙を開くと、そこにはきれいな押し花が…。80年前弟のために摘んだ野草に託したT子さんの愛情、80年間大切に残してきた家族の愛情。押し花を見つめると、長い時間がさらに家族の絆を強くしているように感じました。



手紙にはさまれた押し花

家族で送り合った手紙は、愛の証であり、愛の物語です。家族と一緒に過ごす当たり前の日常が奪われてしまう戦争。この悲劇を二度と繰り返してはいけないこと、平和な暮らしを守るために毎日精一杯努力すること、そして今もなお戦禍に苦しむ方々のために祈り、力を尽くしていくこと。戦後80年の節目に、T子さんの手紙を通してたくさんの思いを強くすることができました。一日も早く、神様の望む平和な世界が訪れますように…。

(小学部教諭・元史料室委員)



かえでくん

吉田ルイ子さんの同級生のご寄稿

本号の特集にちなんで、吉田ルイ子さんの同級生の内海宜子さんが、東洋英和女学院在学時のルイ子さんの思い出を綴ってくださいました。巻頭2～5頁の特集記事とともにご紹介いたします。

楓の園の乙女達 旧友吉田ルイ子ちゃんを偲んで

うつみ
よしこ
内海 宜子(九十一歳)

「フフフフ！(ニコニコ)」

目をつぶるとルイ子ちゃんの幼な顔の「フフフフ！」がクローズアップされます。

面白いものですね。遠い〜昔七十六年も前のまゝの幼な顔のルイ子ちゃん。

でも、アップレ!!

この度NHKが改めて「あの人に会いたい」という番組で彼女を取りあげた、その映像を観て、あの「フフフフ…」を思い出しました。くしくも私は、彼女とは、東洋英和女学院高等部昭和二十五年〜二十八年卒業までの三年間同じクラスでした。担任も変わらず南波シゲ先生にお世話になりました。

私は戦後の家庭の諸事情から、福岡女学院から転入して、高等部一組生として、彼女と同クラスになりました。

同じクラスメイトとして、当時有名だった童謡歌手「川田正子」さん、日銀総裁令嬢「一万田朝子」さん、中国、韓国、日本の三ヶ国の血を受けつぐ「尹葆」さん等、いろとりどりの顔ぶれが学んでいました。

ルイ子ちゃんは、小柄で、どちらかといえば大人気なオーラ乍ら、どこか、深いところに「フフフフ」の泉を持っていて、どちらかといえば…アツケラカンで無邪気英和気質とは違っていました。

「テストの準備なされたア？」

「やっそこ、範囲の一步手前まで漕ぎつけたわ。」

「ノート貸して下さらない？」

「こんなでもよかったら？どうぞぞ！」

などと、期末テストの前の騒々しさの中で!!

「フフフフ…私、何にも準備してなくてフフフフ…。」

とは…とんでも無い。

いつも良い点数を稼ぐのがルイ子ちゃん。

そういう優秀なルイ子ちゃんが慶應義塾大学へ進み、更にNHK国際局に就職活躍という風の便りで知った頃、思いがけず!!

「アメリカ留学に決ったの!!」という電話を私は受け取りました。

「フフフフ…」の笑顔の奥に何という野心?!がひそんでいたことでしょう。

ルイ子ちゃんのそれからのチャレンジの足跡はもう「公」になっています。

白人ロバートと結婚、ニューヨークハーレムでの十年間は『ハーレムの熱い日々』として世に出ました。

ユニークなフォト・ジャーナリストとして日本人としては珍しい黒人問題と人種差別にとりくんだルイ子ちゃん…

天晴れでした。

一九七二年に刊行された『ハーレムの熱い日々』には米国の理想と本音がひそかに語られています。

ルイ子ちゃんは二〇二四年五月三十一日胆管ガンで逝去。八十九歳でした。悔まれるのは、もっと〜同期として彼女の人生の沢山の

経験を伝えてもらえば良かったナということです。

私達昭和二十八年卒のおばあちゃん達は九十一歳になります。

彼女が逝って一年が過ぎました。



利用統計 (2025年4月～2025年9月)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月
展示見学者数		129	115	162	103	90	91
展示見学者区分	学内関係者	56	35	78	31	16	36
	一般	73	80	84	72	74	55
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
資料閲覧者数(累計)		4	6	13	24	10	17
閲覧者区分	本学学生・生徒						
	現教職員		1	4	15	4	6
	旧教職員			2	1	1	1
	同窓生・学院関係者	3	4	6	4	3	6
	同窓生(研究者)						
	他校研究者・学生		1			2	
利用の目的	一般	1		1	4		4
	年史編集	1		2	8	1	2
	著述・論文作成				1	1	
	伝記資料調査	1	1		4	2	2
	記録類の調査・研究	2	5	6	10	5	8
	学院広報関係			5	1	1	3
	その他						2
資料の種類(重複あり)	東洋英和関係	4	5	10	24	8	16
	カナダの教会関係					1	3
	村岡花子関係			3		1	1
	周辺地域史						
	その他		1				
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
月別レファレンス件数		14	9	15	18	7	18
質問者の区分	本学学生・生徒	1					
	現教職員	6	6	7	6	3	7
	旧教職員		2	3	1		
	同窓生・学院関係者	2	1	2	4		3
	同窓生(研究者)						
	外部研究者・学生	4			3	3	
	外部研究機関	1			1		3
質問内容(重複あり)	一般			3	3	1	5
	資料所蔵調査	4	5	4	4	3	4
	写真所蔵調査			1	2		3
	事項調査	8	4	4	12	3	8
	その他	4	3	6	4	1	3

史料室の活動より (2025年4月～2025年9月)

(☆は複数回)

2025年4月

- ・展示コーナーで新任者に学院沿革説明(松本)
- ☆来室／調査一中高部母の会役員。ヴォーリス作詞の英語校歌について
- ・校正一大学図書館「図書館だより」2025年4月号のうち横江幸に関する記事
- ☆執筆者検討と依頼／編集一小学部校地校舎記録集
- 17日、21日一大学フレッシュマンセミナー「自校史」授業
- ・出張一大学礼拝奨励のため(三笠)
- ・展示案内一Lourdes Hill College校長
- ・来室／調査一ちひろ美術館学芸員原島恵氏。企画展示のため、卒業生の岡上淑子氏関連資料
- ☆照会一院長より、学院標語の聖句について
- ・『140年史』(2刷)800冊増刷、納品

2025年5月

- 1日一NHK「グレーテルのかまど」撮影(展示コーナー、ガネットハウス鳥居坂にて)。画像や資料を提供。村岡恵理氏が「いちご水」について解説
- ☆資料提供一桜プロジェクト動画のため(学院HPなどに掲載)
- ・来室／調査一村岡恵理氏。「らんたん」の文庫版書評執筆のため河井道関係資料
- ・9日「史料室だより」No.104納品、発送
- ・撮影一日本聖書協会。村岡花子の口語訳聖書
- ・校正一小学部「学校案内」(2026年入学者用)
- ・来室／調査一水谷悟静岡文化芸術大学教授。「敬神奉仕」制定をめぐるの教員会議録など

2025年6月

- ・来室／調査一中高部国語科教諭(竹内委員ほか)。中学部オープンスクールで『赤毛のアン』、村岡花子を紹介するための資料を検討
- 3日、10日一大学「東洋英和の歴史」授業(松本)
- ・展示コーナー来室一大坪寛氏。「史料室だより」特集の岡上

淑子氏、片山廣子について情報共有

- ☆来室／調査一中高部元EDC部員。OG会準備のため「楓」、楓祭パンフレット、「東洋英和新聞」など
 - 7日一同窓会総会後の140年史刊行記念講演第2弾 水谷悟静岡文化芸術大学教授講演の手伝い、年史販売
 - ・神奈川県立図書館へ『東洋英和女学院140年史』『東洋英和のれきし』を納本
 - ☆照会一中高部入試広報担当より、中高部学校案内の沿革掲載項目について
 - ☆140年史年表修正とアップデート作業(酒井)
 - ☆来室／調査一ハンドベル部OG。ハンドベル部50年史のため「楓」や画像など
 - 14日一東洋英和幼稚園園舎見学会(手伝い)
 - ☆来室／調査一朝日新聞社記者。戦時下の女学校のクラス日誌について
 - 20日一第1回 史料室委員会
 - 21日一大学「東洋英和の歴史」授業。史料室・展示コーナーを約25名の大学生が見学
 - ☆来室／調査一同窓生。「ぎんなんだより」No.41～54(小学部校地校舎記録集執筆準備のため)
 - ・来室／調査一中高部教諭。1974年～楓祭の写真アルバム→学園紛争などを含めた複雑な楓祭開催の変遷などについてご教示いただく
 - ・出張一全国大学史資料協議会東日本部会2025年度総会・記念講演会・見学会・情報交換会(於 青山学院)
 - ・照会一平体委員より、吉田ルイ子関連
- ### 2025年7月
- ☆来室／調査一中高部聖書科教諭。平和教育授業準備のため戦時中のクラス日誌
 - ・来室／調査一本学教授。「筑豊の子供を守る会」関連資料過去に行われたインタビュー記録なども紹介
 - 5日一桜プロジェクト0組～3組合同リユニオン

- ☆照会—学外研究者より、学舎における噴水とバラについて→木造校舎時代の庭、山尾邸などを紹介
- ☆打ち合わせ—楠山顧問・総務課と総合案内（英語版）改訂にあたり、歴史説明、年表などについて検討
- ・照会—中高部副部长より、中高部正面玄関の扉の制作年は？→1933年。旧校舎の鉄枠を引き継ぐ
- ☆編集／執筆／校正—「史料室だより」No.105
- ・来室／調査—幼稚園教諭。ホームカミングのため幼稚園アルバムをピックアップ（参加者閲覧のため）
- ☆データ整理—史料室図書目録（多数のテーマの目録が混在）など、各種目録データを整理
- ・展示変更—ここ10年間は『赤毛のアン』翻訳原稿の原資料を展示してきたが、村岡家との協議により、資料の劣化防止のため今後は複製を展示することに決定
- 20日—旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージ 清掃奉仕とオーナー夫妻との交流（史料室スタッフほか同窓生有志約30名参加）
- ☆来室／調査—小学部地主委員。集団疎開時の親子の往復書簡、集団疎開絵日記ほか
- ☆来室／調査—小学部教諭。戦中の教務日誌や過去の小学部プログラム、「ぎんなんだより」ほか
- ☆来室／調査—元東洋英和幼稚園長。丹羽輝子元園長の「かえで」記事
- ・来室—フェリス歴史資料館山口まどか氏。展示コーナーや書庫を見学。目録や資料管理法について情報交換
- ☆資料整理—140年史年表作業後の資料確認・整理ほか
- ☆執筆／校正—英語版総合案内 History／宣教師プロフィールの日本語原案作成。楠山顧問と掲載内容を協議

2025年8月

- ・来室／調査—卒業生。各時代の幼稚園舎の資料
- ・校正—エクスナレッジ『東京の文学館』（増補改訂予定）の村岡花子文庫展示コーナー紹介ページ
- ・来室／調査—学外研究者。WMS年次報告書
- ・照会—学外研究者。「史料室だより」No.104、10ページ掲載の1944年に講堂の「敬神」の額が外されたという証言について、戦時中の校名改称、学則変更の変遷、奉安庫について
- ・インタビュー（陪席）—阿部恵代氏（1961年高等部卒）。小学部の思い出を聞き取り（三笠）
- 29日—栃木県出流山満願寺に出張（高橋院長、楠山顧問、小学部 馬淵教頭、地主委員、鈴木教諭、史料室松本・三笠）竹村教誠山主へ感謝状を贈呈、懇談

2025年9月

- ・第1回 150年史研究会
- ・照会—中高部長より、戦時下の学校生活、勤労動員など
- ☆照会—小学部校地校舎記録集作成関連多数
- ・来室／案内—大学図書館WELLメンバーが展示コーナー、史料室を見学
- ・小学部教員座談会（陪席、三笠）
- ☆来室／調査—NHK猪俣修一氏。戦時下のクラス日誌等
- 12日—第2回 史料室委員会（9月5日から延期）
- ・見学—同窓会湘南支部4名
- ・来室／案内—静岡文化芸術大学水谷悟教授ゼミ生が展示コーナー、史料室を見学

【おもな移管資料】

- ・中高部より、コロナ関連資料（掲示物など）
- ・中高部より、ハンドベル部資料
- ・中高部より、行事プログラム類2かご
- ・東洋英和幼稚園より、山口孝子画 幼稚園での生活を描いた葉書5枚組（2025年7月22～24日開催のホームカミングの際に作成。寄付者への返礼品。非売品）

【おもな受贈資料】

- ・郷司尚子氏画『はみだし140年誌』表紙原画
- ・三宅拓也京都工芸繊維大学助教の研究室でスキャンした東洋英和幼稚園園舎の図面データ
- ・内藤達元中高部数学科教諭より東洋英和幼稚園舎、松ノ井寛治関連データ
- ・村岡家より1970年開催大阪万博「赤毛のアン」ミュージカルレコードほか
- ・昭和42年 東洋英和女学院中学部 入学試験問題集（同窓会複製。封筒入り）
- ・父親有志の会より「第27回ハンドベルフェスティバル」DVD
- ・八十島栄元中高部数学科教諭と、そのご息女たちの東洋英和関係資料多数
- ・手書きの「表彰状」（第2回楓祭実行委員会高校生人気投票よき上級生だったで賞 高2の部 第一位 安部利絵殿）
- ・井上健之助先生からの卒業記念色紙、ペンダントヘッドほか
- ・マルタとマリアの会2005年度資料ほか
- ・五味澄子元同窓会会長関連資料
- ・「1995 CHRISTMAS TOYO EIWA」錫製のしおり1点（裏にSeagull Pewter Canadaと銘あり）
- ・文集「一ねんせいになって 1961. 4.14」、小学部2年夏期学校プログラムほか
- ・軽井沢追分寮の看板の字を揮毫する外崎長三郎小学部長、看板、看板の裏側の写真3枚

【書籍・雑誌・論文】

- ・山本麻紀幼稚園教諭より、『丹羽輝子姉 追悼集』（婦人会だより106号）、西那須野教会婦人会、2018年
- ・青木豊氏（渡辺里雨氏ご子孫）より、卒業生青木かくの子息たちの著作冊子①青木喬『懐古小史』昭和59年、②青木愛子『青木実追想録』昭和39年12月
- ・Jay Navok and Sushil K. Rudranath, *Warriors of Legend*（セーラームーンの研究書。東洋英和について言及あり）
- ・清水麻利子氏より、『日本文学文化』第24号、2024年（清水麻利子「片山廣子（松村みね子）翻訳年譜 戦後の翻訳の再出発～短歌からの考察～」所収）
- ・『東京家政学院100年史』2025年（大江スミなどの画像を多数提供）
- ・奥田実紀氏より、自著『ふくろうの本 増補版 図説 赤毛のアン』河出書房新社、2025年（画像提供、編集協力）
- ・佐々木肇氏（元職員）より『三十年のあゆみ：東洋英和女学院卒業三十周年記念』（1977年）、村上陽一郎元学長著訳書ほか多数
- ・松本寛二著『神様はお急ぎにならない』
- ・東京女子大学同窓会安井てつ研究会より、安井てつ研究会報告書ほか
- ・橋詰正治元中高部理科教諭より、研究成果集5冊（『実験ノートブック2004～2018』『時間割の科学』ほか）
- ・佐佐木朋子氏より、「竹柏会 心の花【特集 片山広子】」竹柏会、2025年5月（佐佐木朋子「面影片山広子 花屋の窓」所収）（資料提供）
- ・持田叙子氏（卒業生・近代文学研究者）より、自著『ことばで愛し、ことばでたたかう 日本文学の宝石箱』岩波ジュニア新書、2025年
- ・鳥飼玖美子氏（卒業生）より、共著『AIを外国語教育で使わない選択肢はもうない』ひつじ書房、2025年ほか
- ・行司千絵氏より、自著『装いの翼 おしゃれと表現と』岩波書店、2025年（資料提供）

【おもな画像提供】

- ・NHK「偉人の年取」廣岡浅子の回のため、廣岡浅子と村岡花子との画像2点

🍁 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を集めています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけますと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】東洋英和女学院史料室

〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40
Tel 03-3583-3166（直通） Fax 03-3583-3329
E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp

🍁 2025年度

史料室委員会委員

委員長	山下 久美 （かえで幼稚園）
大 学	平体 由美 野田 潤
中 高 部	竹内 明美 高橋 美抄子
小 学 部	地主 武史
東洋英和幼稚園	木村 晴香
史 料 室	松本 郁子 三笠 知世